

出版物的東西交流

岡本 さえ*

摘要

論文以使用漢文拉丁文兩國語言在十七世紀的廣東印刷而成的『平反冤案』(東京財團法人東洋文庫所收藏)一書為起點。此書中提到許多關於東西方的文化交流。此外，漢字與羅馬字母並用寫而成的資料也在傳教士的「出生地」－葡萄牙、西班牙、法國的圖書館中大量被保存著。再者，在作為漢文書籍「出版處」－中國所印刷的這些含羅馬字母的出版物並不僅見而且有不少被保存在日本的圖書館中。

在此可下結論，凡此內容有明顯提到東西交流的書，不論其作者是出生於東方還是西方，我們可以斷定這些書都是在亞洲所完成的，特別是在東亞漢字文化圈中。其中最大的理由是：在漢字文化圈中比較容易以木版印刷印出羅馬字母，然而，在西歐，漢字的印刷是極其困難的。

關鍵詞：漢字、羅馬字母木版印刷

* 政治大學日本語文學系客座教授 東京大學名譽教授
2003.8.31 到稿

出版物の東西交流

岡本 さえ*

要旨

漢文とラテン語の2カ国語を用いて17世紀に広東で印刷された『無実の勝利』（東京・東洋文庫蔵）を起点として、1冊の中に東西交流が顕著な本を調査した。宣教師の「出身地」ポルトガル、スペイン、フランスの図書館にも、漢字とアルファベットを併用した資料は、大量に保存されていた。しかしそれらの資料が実際に作成された場所は、アジア各地であった。また漢籍の「出版地」である中国での、アルファベットを含む複数言語の印刷は珍しくなく、日本の図書館にも豊富に所蔵されている。結論として、東西交流が書物の形態に明らかな書物は、著者の出身地の東西を問わず、アジア、特に東アジア漢字文化圏で完成されたと断定できる。その大きな理由は、漢字文化圏でアルファベットを木版印刷することは容易であったが、反対に西欧での漢字印刷は極めて困難であったことである。

キーワード： 漢字、アルファベット木版印刷

East and West : cultural exchanges in publications

Okamoto Sae*

Abstract

This paper begins with the introduction of a book <Innocence gains a victory> which was written in two languages — Kanji and Latin. GuangDung printed and published it in the seventeenth century (it is now part of the collection of Toyo Bunko, an incorporated foundation in Tokyo). The paper develops a detailed investigation focusing on the books which display remarkable Eastern and Western cultural exchanges.

A large quantity of the texts written both in Kanji and the Roman alphabet are mostly kept in National Libraries all around Portugal, Spain and France where the missionaries were born. However, the actual printing was the work of Asian printers.

The Kanji books were printed in China, the place of publication. Kanji books which contain plural languages including the Roman alphabet are not very rare. For instance, a quantity of these books are in fact kept in the classical Chinese collections of libraries in Japan.

In conclusion, it is certain that most books that show in book form Eastern and Western cooperation were completed in Asia, especially within the cultural circle of East Asian Kanji, whether the author was born in the East or the West. The major reason is that it was fairly easy to print the Roman alphabet using wooden printing methods within the Kanji cultural circle. By contrast, it was extremely difficult to print the Kanji alphabet in Western Europe.

Key word : Kanji, the Roman alphabet wooden printing

*** guest professor of National Chengchi University and honorary professor of Tokyo University**

出版物の東西交流 — 東アジア起源の資料 —

岡本 さえ（颯葉）

出版物の東西交流を伝える資料には、言語や文化の違いを超えて未知の異文化を探ろうとする人々の熱意が溢れている。ここでは主として日本の図書館に所蔵される資料から、近世世界における出版物の東西交流の実態を追究したい。

始めに、東京の財団法人東洋文庫が収蔵する *Innocentia Victrix*（『無実の勝利』と訳す。以下、この書名を用いる。）¹という、ラテン語と漢文の2カ国語で書かれた木版印刷を取り上げる。中国の広東省で出版されたこの本は、17世紀後半に清朝が暦の作成法に西洋暦法を受け入れる発端となった有名な揚光先事件²の顛末を、在華ポルトガル宣教師グヴェア（Antonio de Gouvea 何大化 1592-1677）がイエズス会の視点で著わしたものである。（図1）³

中華世界で伝統的に使われていた大統暦法を捨てて、清朝が西洋暦法を採用したのは、政権樹立直後の満人が漢民族の伝統に固執しなかったからだ、と言われている。康熙帝の裁決によって西洋人宣教師が勝利を得たのは、1669年であった。

¹本書の全標題は、*Innocentia Victrix sive Sententia Comitum Imperii Sinici pro Innocentia Christianae Religionis Lata juridice per Annum 1669*. 本文では、その *Innocentia Victrix* という主要部分を記した。

²揚光先事件とは、安徽省出身の楊光先（1598-1669）が1664年に天文官李祖白撰『天学伝概』を非難して、天主教は清朝を滅ぼす邪教として告発すると同時に、西洋暦法の中国導入に反対した事件である。清朝は1665年に天主教を糾弾し、当時欽天監監正だったアダム・シャルルらイエズス会宣教師や漢人の天文官を拘置。シャルルは獄死、李祖白ら5名の漢人は処刑された。清朝は楊光先を欽天監監正に任命したが、1669年（康熙8年）の公開実験の結果、西洋暦法の正しさが認められ、楊光先は失脚した。

³筆者は現在台北に滞在中であり、財団法人東洋文庫に複写・掲載を申請できないため、図1はパリ国立図書館蔵版の複写を使用する。（Collection de Maurice Courant）図1以下、図5まで同じ。

それ以後清朝では、1837 年まで 150 年間以上も天文台（欽天監）の管理を、西洋人に委ねる。

その記念すべき転換を告げる『無実の勝利』は、東洋文庫に収蔵されているだけでなく、ヨーロッパの図書館でも原典を閲覧でき、稀覯書扱いにはされていない。しかし同書に関するまとまった専門研究をまだ筆者は見たことがない。図 1 のように、表紙見返しの左側には、「上主赫臨、義を世に宣ぶ」（デウスは輝き出でて正義を世界に告げる）と書かれ、漢文の下には同じ意味のラテン語がある。この右頁には「勝利を得た無実あるいはキリスト教の無実のための御前会議の意見」というこの本の長い標題があり、「1669 年の裁決による」「アントニー・デ・グヴェア」「中国語－ラテン語で表記された」「中華帝国の広東省の省都広州において」、最下段に「人類救済 1671 年」と刊行年が西暦で記されている。

同書の本文では先ず、獄死したイエズス会士アダム・シャール (Adam Schall von Bell 湯若望 1591-1666) の無実と、広東に追放された宣教師の帰京を訴えて、イエズス会宣教師たちが康熙 8 年 5 月に出した上奏文を掲載している。(図 2) 図 2 を見ると当時の漢籍には存在しなかった書式が見られる。すなわち、縦書きの文章が、左から右に進んでおり、しかも各漢字にアルファベットで発音記号が付けてある点が当時の漢籍とは異なって型破りである。

それに応じた康熙帝の諭旨は、楊光先の誣告を認め、本来楊を処刑すべきところであるが老齢に免じて流刑にしたこと、暦法観測に携わるフェルビースト (Ferdinand Verbiest 南懷仁 1623-86) たちの帰京を許し、信仰のためにイエズス会士が祈りをささげるのは認める、しかし教会を建て一般の中国民衆を入信させる活動を行うことは禁じている。(図 3) 図 3 では左頁に漢文、次いで右頁に *Id est* として忠実なラテン訳を付けている。この叙述形態は同書に一貫している。

清朝は正確な曆を発行する必要から、ヨーロッパ人宣教師たちの技術的協力を得るため、当時欽天監に課せられていた風水の「選択」（皇室の墓の位置などを占う仕事）を宣教師の任務から取り除いたり、獄死したアダム・シャルのために祭文（Elogium Exequiale）を与えたりしている。（図 4）図 4 の漢文書体は、今までと全く異なっている。『無実の勝利』の結論となる康熙帝の指示と裁定（Placitum Imperatoris ac Sententia）は、一層寛大であり、フェルベースト以外の曆法に通じていない宣教師たちにも広東からそれぞれ活動していた教会に戻ることを許している。（図 5）但し、図 5 の右頁に見えるように、宣教師が民衆に向かってキリスト教を勧めることを許さないという、清朝の方針は変えていない。それ故、宣教師の本来の目的から言えば、全面的な勝利ではなかった。グヴェアが何を目的として 2 カ国語で印刷したかは、『無実の勝利』の全体像に関わる興味ある課題であるが、ここでは出版形態の問題に絞って検討を続ける。

上記のように、近世の東アジア社会で、1 冊の本の中に複数の言語が印刷されることは、しばしば生じたのだろうか。あるいは当時のヨーロッパでも、アジアの言葉が印刷された本が出版されたのだろうか。出版物の東西交流について追究しよう。

二通りの調べ方ができる。

第一は、著者グヴェアの「出身地」から調べる方法である。上記の『無実の勝利』を例に取れば、グヴェアが西欧出身であることに着目して、彼のように文字体系の異なる 2 カ国語で書いた人が、他にもあったかをヨーロッパで調べるのである。

第二は、書物の「出版地」から調べる方法である。『無実の勝利』が、17 世紀に広東で出版されたことに注目して、東ア

ジアに西欧人と協力して作った本があるかどうかを、探すのである。

第一の「出身地」による検討である。よく知られているように、ヨーロッパでは17世紀以後大量出版時代を迎え、旅行記ブームにも後押しされてアジアとの交流を記録した本が多数刊行された。これらの本は現在、欧米の図書館に膨大に保存されているし、一部は日本でも第一次世界大戦後にオーストラリア外交官モリソン（Robert Morrison）から購入し、それらは東京の財団法人東洋文庫で読むことができる。ただし、西欧人がアジアに関する旅行記、報告書、研究書を出版する際には、ヨーロッパの読者層を想定していたから、欧文で書き欧文で発行するのが常であった。例えば江戸時代に日本に来たケンペル（Engelbert Kaempfer 1651-1716）やシーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold 1796-1866）は、日本について克明に記録しているが、それらはヨーロッパの読者に向けて書かれた本である。

それに対して、筆者が探したのは1冊の本の中に、東西文化の交流が証明されている例である。2002年秋に訪れたポルトガルの国立図書館（リスボン）では、カトリック宣教師の残した手書き文書が保存されていた。ポルトガル語と漢語を対照した語彙集（図6）、ローマン語と漢語を対照した語彙集（図7）をご覧頂きたい。

図6と図7を比較すると、書式の相違が分かる。図6は右から左に漢字が書かれ、図7は左から右に進む。双方とも、ヨーロッパ語を宣教師が書き、漢字を書いたのは漢人であると思われ、東西交流が文書の作成自体に表われている。中国の古典『大学』をスペイン語で翻訳した文書も保存されていた。（図8）

ヨーロッパ人と中国人の協力によって作成されたこうした手書き文書は、2001年秋に訪れたスペインの歴史アカデミー

(マドリード)でも閲覧でき、東西交流を示す資料は、宣教師の出身地に大量に所蔵されていることが確認された。また、漢語・欧文アルファベットの2カ国語のみならず、ベトナム語・欧文アルファベットの書も散見され、アジア諸言語とヨーロッパ諸言語の交流が、17世紀・18世紀に活発に行われたことを窺わせる。

ところが、これらの資料がどこで書かれ、どこで完成したか、その場所を調べると、全て宣教師の出先であるアジア各地(ゴア、マニラ、マカオ、広東、杭州等)で作成されたものであった。例に挙げた図6・図7はいずれもマニラで書かれている書物の複写で、リスボンの国立図書館にマイクロフィルムとして収蔵されている。

何故ヨーロッパ人は17・18世紀に大量出版時代を迎えていたにもかかわらず、上記の文書を本国で作成しなかったのだろうか。その最大の原因は、西欧で漢字を活字として印刷することが、当時はきわめて困難であった、と考えられる。漢字をヨーロッパの印刷物に掲載する場合は、ヨーロッパ人は漢字を手書きで書いた上で銅版画の一部として、僅かに数個の文字を挿入する方法しか採れなかった。ましてや何百、何千に及ぶ漢字を活字に組んで印刷することは不可能であるし、試みる知識も発想もなかった。さらに、17・18世紀ヨーロッパでは特別な学者がようやく中国語を学び始めた時代であり、出版業界の中にも読者層の中にも漢字を理解できる人は、ほとんど存在しなかった。

それに対して東アジアでは、数十文字に過ぎないアルファベットや記号を、木版印刷することは17・18世紀でも簡単に実現できた。マカオはポルトガル領に、マニラ(フィリピン)はスペイン領になったとはいえ、16世紀までは中国商人、特に貿易商人の中継地であったから、漢字を書く人々は街に溢れていたし、出版技術も蓄積があった。アジアに来たヨー

ロッパ人が、東アジアの言語を使用した出版物を、出身地の西欧でなく、出先のアジア各地で作成した事実は、上記の理由に基づいている。

第二の「出版地」による調査を取り上げる。例えば日本各地の図書館で見られる『西儒耳目資』は、1623年に中国山西省の王徴がベルギー人イエズス会士トリゴー（Nicolaas Trigault 1577-1628）に協力し刊行したヨーロッパ人宣教師の「耳目」に役立てるための発音ハンドブックである。同書の「萬國音韻活字図」を見ると、多数のアルファベットが木活字で印刷されている。（図 9）図 9 に続き、アルファベットの母音と子音に当たる音をもつ漢字を記し、その組み合わせで中国語の発音をローマ字表記する試みを行っている。（図 10）図 10 は現在のピンイン表記の先駆的な仕事である。

上記の王徴がスイス人のテレンツ（Jean Terrenz 鄧玉函 1596-1630）と協力して 1627 年に出版した『遠西奇器図説録最』を見ると、「書架図」の中にアルファベットが印刷されている。（図 11）図 11 には 8 個の歯車を使って本を回転させ、閲覧に供する書架が描かれている。

日本の上智大学キリシタン文庫にある『口鐸日抄』は、1630 年から明朝末期の 10 年間に及ぶヨーロッパ人宣教師と中国福建省の文人たちとの対話記録を印刷出版した 8 巻本である。すべて漢字のみで印刷し、図も挿入していないが、成立過程や対話内容から見て東西交流の良い実例である。（図 12）図 12 では、泰西の思及艾先生（アレーニ Julio Aleni 艾儒略 1592-1649）と盤石廬先生（ルドミナ Andre Rudomina 1594-1633）の名前を右側に高く掲げて印刷し、ヨーロッパ人に敬意を表している。アレーニは『職方外紀』の著者として有名であり、ルドミナはリトワニアから来たイエズス会士である。この二人が口述し、福建省や江南各地の文人が手分け

して記録し、校正したという冒頭部であるが、中心になって作成したのは、図 12 の「口鐸日抄小引」を書いた李九標である。⁴

なおアルファベットを漢字と共存させて組み込んで木活字で印刷したり、作成過程に東西交流が表われているイエズス会士関連著作は、明末から清初にかけて長江以南の沿岸都市で出版され、版を重ねた後に首都北京で刊行される場合が多かった。

以上 2 つの調査方法によって明らかになった事実は、著者がヨーロッパ人であれ、漢人であれ、1 冊の本の中に東西交流が表われている書物は、全てアジアで作られた、しかし現在それらの資料は、圧倒的多数がヨーロッパの図書館に所蔵されている、という点である。

何故、作成や出版が東アジアを中心に行われたにもかかわらず、現在その所蔵は微々たる状態におかれているのであろうか。近世の東西出版交流を担った西欧人がキリスト教宣教師であったために、18 世紀以後厳しい禁教令を出した東アジアではこれらの東西交流資料も禁書となるものが多く、焼かれたり、廃棄された本が多かったためであろうか。例えば南京から長崎に来る漢籍は、日本の書物改役によって取り調べられ、少しでもキリスト教に関係する書籍は輸入を禁じられた歴史がある。

あるいは中華文明圏では、もともと外国人が参加して作った出版物は正統な漢籍と認められず、東西交流を示す資料は粗末に扱われ散逸してしまったのかも知れない。台北在勤中に、台湾における収蔵資料を調査できれば幸いである。

筆者は今後さらに、出版物の東西交流がもつ文化史的意義

⁴図 12 も、(注 3) と同じく、上智大学キリシタン文庫に掲載申請ができないため、パリ国立図書館蔵版の複写を使用した。

について研究を進展させたい。

付記：本論文は、筆者が 2003 年 6 月 8 日に日本山口県医師
総会で口頭による講演を行った内容と、重複する部分
がある。